

“双葉病院事件”の真相、当事者医師、語る

関係機関の救出対応の遅れ、報道バッシングを批判

2011年11月1日 橋本佳子(m3.com編集長)

ツイート

10月29日に開催されたNPO法人医療制度研究会主催の講演会で、福島県の双葉病院の常勤医だった杉山健志氏は、東日本大震災後の福島第一原発事故後の避難について、福島県や同病院のある大熊町、自衛隊の対応の遅れやその後のマスコミ報道によるバッシングを受けたことを問題視、現在は事実解明と名誉回復の途上にあることを、杉山氏自身が知り得る範囲の当時の避難状況を克明に紹介しながら語った(詳細は、後述)。



双葉病院の医師だった杉山健志氏は、「福島県は、双葉病院への激しいバッシングと報道災害の原因を作ったという認識はないのか」と憤りを込めて語った。

「まだ分からないことが多い。大熊町はなぜ双葉病院やドーヴィル双葉(介護老人保健施設)に重症や寝たきりの高齢者が残っているのを知りながら放置したのか。大熊町と県の災害対策本部の連携にエラーがあり、そのエラーが致命的な救出の遅れの原因ではないか。3号機の水素爆発後、職員の車を借りて双葉病院からオフサイトセンターに向かった自衛隊員はいったいどこに行ったのか、双葉病院の救出を手配したのか。なぜ福島県災害対策本部救護班は誤報を流したのか。県は、双葉病院への激しいバッシングと報道災害の原因を作ったという認識はないのか。病院の名誉を傷つけたとは思っていないのか。県は遺族に対して避難の遅れがあったことを説明すべきではないか。被災病院である双葉病院に責任を押し付けるのか」

医療法人博文会が運営する双葉病院は、第一原発から約4.5kmの場所にある350床の精神病院。福島県の沿岸部の浜通り地域では最大規模の精神病院だ。当時の常勤医は7人。「来年で創立50周年になる。『原発近くに精神病院を建てて』とも言われたが、それは逆で第一原発よりも病院の歴史は古い」(杉山氏)。震災当時の入院患者は338人。その約4割は高齢者で、寝たきりの患者も多かった上、高カロリー輸液の患者が20人以上、経管栄養の患者も30人以上いた。また、同じ博文会が運営する介護老人保健施設「ドーヴィル双葉」(定員100人)は、病院から約300mの場所にあり、一体的に運営していた。



双葉病院院長の鈴木市郎氏は、「いまだに何があったのか、分からないことが多い。名誉回復よりも、まず真相を知りたいというのが一番の思い」と話している。

全国紙をはじめ、マスコミが「双葉病院が、患者を置き去りにした。患者の搬送に付き添わなかった」などと一斉に報道したのは3月18日のこと。しかし、現実とは異なる。双葉病院は、大熊町などに何度も患者の救出を要請していたが、県、町、自衛隊の対応は遅れた。救出は計3回にわたったが、338人のうち、第一陣は3月12日、第二陣(34人)は3月14日、第三陣(90人)で患者の救出を終えたのは3月15日のことだ(院内での死亡は、13日夜から14日未明までに3人、14日から15日に死亡したと推定されるのが1人、歩行可能な認知症の患者が1人行方不明)。

第一陣には職員が付き添えたが、第二陣の際は自衛隊員によって次々と患者はバスに乗せられ、行き先不明のままの出発を余議なくされた。第二陣の出発後、第一原発3号機の水素爆発があり、杉山氏が言及したように自衛隊員がオフサイトセンターに向かったものの、支援は来ないまま、院長らは20km圏外への緊急避難を命じられた。その後、

ログインID

パスワード

次回から自動でログイン

[ID・パスワードを忘れた方はこちら](#)

m3.comは、医療従事者のみ利用可能な医療専門サイトです。会員登録は無料です。

m3.comを検索

キーワードを含む記事を検索

検索ワードを入力



注目キーワード

[肝機能障害](#)

[潰瘍性大腸炎](#)

[胃癌](#)

[乾癬](#)

[特定行為研修](#)

[医学雑誌](#)

[憩室出血](#)

[ASV](#)

[肺水腫](#)

[病院見学](#)

[添付文書](#)

[地域医療構想](#)

[CHADS2](#)

[EBウイルス](#)

[肺炎](#)

[内科専門医](#)

[AED](#)

[胃内視鏡検診マニュアル](#)

[水銀血圧計廃棄方法](#)

[標準採血法ガイドライン](#)

[医事紛争](#)

[ファーストシシ](#)

[胸腔ドレーン](#)

[薬剤総合評価調整加算](#)

自衛隊と合流して患者の救出に向かう予定だったが、災害対策本部、警察と自衛隊の間で連絡ミスがあったためか、第三陣の救出には院長が立ち会うことはできなかった。

3~5km圏内にある県立大野病院は3月12日、双葉厚生病院も3月13日の朝には避難が完了している(『「死ぬ、この世の終わりだと思った」と職員 - 双葉厚生病院院長・重富秀一氏に聞く◆Vol.3』を参照)。「他の10km圏内の二つの民間病院も、3月14日に避難を終えている。これらに比べて、際立って双葉病院の患者の救出は遅れた」と杉山氏は指摘する。

マスコミによるパッシング報道は、県災害対策本部の3月17日の発表がきっかけ。県がマスコミに配布した資料によると、いわき光洋高校に避難した第二陣の患者について、「双葉病院に救出に向かったが、病院関係者は一人も残っていないため、患者の状態は一切分からないままの救出となった」と記載。しかし、これらの患者を送り出した際、院長は院内に残っていた。院長が立ち会えなかったのは、前述のように警察から避難指示を受けた後の第三陣の救出の際だ。「患者だけを残し、病院職員がさっさと逃げたという印象を受ける文章であり、許せない」と杉山氏。

杉山氏や院長の鈴木市郎氏は、3月17日の時点では、博文会がいわき市で運営する、いわき開成病院で避難患者の診療に当たっており、マスコミからの電話で県の発表を知った。鈴木氏は、県にすぐ抗議の電話をかけ、県は「避難時に院長はいた」との訂正を出した。しかし、時事通信はこの旨を配信しているが、3月18日には全国紙には双葉病院パッシングの記事が掲載された。

シンポジウム後、講演会に来ていた院長の鈴木市郎氏は、「名誉回復よりも、一番はいったい何があったのを知りたいということ。国、県、町、警察、自衛隊は何をしていたのか」と語った。前述のように、例えば、第一原発の3号機が水素爆発した後、病院に一人いた自衛隊員が車で1分ほどのオフサイトセンターに、「指示を仰ぐ」と言って、職員の車を借りたり、帰ってこなかった。



患者救出後、病院外に放置されたままのベッド(4月5日撮影)。いまだにそのままの状態になっているという(写真提供:杉山健志氏)。

杉山氏によると、最近は徐々に、双葉病院関係者の声が報道されるようになってきているという。今夏に『週刊ポスト』でこの問題を取り上げた、ノンフィクションライターの森功氏は、「新聞報道を見て、『ひどい病院だ』と思ったのが第一印象。しかし、院長と知り合うきっかけを得て話を聞いた。院長は今年9月で77歳だが、震災から5日間ほとんど徹夜で患者の面倒を見ていた。“戦場”のような状態の中、孤軍奮闘されたことを聞いた。これは間違いなく本物だと思った」と語った。

また弁護士の上清成氏も、「誰が置き去りにされたのか。国、県、大熊町が、双葉病院を置き去りにしたのではないか。しかし、“患者が置き去りにした”として報道されたのは院長」と語気を強め、県災害対策本部などの対応、情報管理が混乱しており、マスコミ報道にも問題があったと指摘した。森氏と井上氏はともに、今後、今回の事件を、マスコミ報道のあり方も含めて検証していく必要性を強調した。



震災後、杉山健志氏は、何回か双葉病院に行ったが、野生化した犬や猫が院内に入っていたという(9月21日撮影、写真提供:杉山健志氏)。

【杉山氏が語った双葉病院の避難の経緯】(太字は杉山氏が強調した部分)

第一陣の経緯

3月11日

・電気、ガス、水道には問題なかったが、一般電話は寸断された。周囲の道路も陥没力所が多数。病院の建物自体は大きな損傷なし。職員や患者にけが人なし。療養病床で配管が損傷して水漏れし、2階、3階が使用不能になったため、1階などに患者を移動。当時いた医師4人、看護師、事務職員が泊まり込み、対応。

一般名処方加算

連携管理加算

認定薬剤師

医療事故

健康サポート薬局

処方せん

3月12日

- ・5時44分、第一原発の避難指示エリアが3kmから10kmに拡大し、病院も避難指示のエリアになったことを町内放送で知る。
- ・朝8時から病院職員が1時間ごとに町役場に行き、町長に直接、避難車両の手配を依頼。車椅子や寝たきりの患者も多数いることを伝える。
- ・12時頃、大型観光バス5台が双葉病院に来る(乗っていたのは運転手のみ)。
- ・バスでの避難が可能なADLの高い患者を中心に各病棟で看護主任が緊急のトリアージを行い、患者209人、職員60数名がバス5台、病院車両とともに14時頃に、第一陣として病院を出発。出発時、既に町は無人。
- ・バスには、当面の薬、非常食、水、紙おむつなどを積めるだけ積んだ。長期の避難は全く予想していなかったため、カルテは病院に残した。
- ・第一陣が病院を出発した1時間半後に、第一原発1号機が水素爆発。
- ・第一陣は数カ所の避難所をたらい回しにされた後、第一原発から50km西にある三春町の中学校の体育館に到着(出発から5時間半後)。

3月13日

- ・第一陣は体育館に1泊した後、207人(209人のうち2人は退院)が、医療法人博友会が経営する、いわき開成病院(精神科162床)にバスで避難。
- ・15日から22日にかけて、双葉病院から一緒に避難してきた15人程度のスタッフによって、ほぼ全患者が関東圏の病院に転院。

第二陣の経緯

3月12日

- ・病院には院長(当時76歳)、ドーヴィル双葉は施設長と職員十数人が残る。第一陣の避難時、再度、町役場にいた町長に引き続き避難車両を回すように依頼。役場の災害対策本部のホワイトボードには、双葉病院とドーヴィル双葉に残っている患者数が書かれていた。
- ・午後3時36分、第一原発1号機が水素爆発。町役場も避難。
- ・ドーヴィル双葉も、施設長(医師)と事務課長を残して職員は全員避難。
- ・後続の避難車両も、自衛隊も、警察も来ないため、夜になって双葉町の老人保健施設で救出中の自衛隊に、双葉病院とドーヴィル双葉の救出を依頼。
- ・20時、自衛隊が大型トラック3台でドーヴィル双葉に来るが、「寒いし、生命に責任を持ってない」と搬送を断られる。
- ・夜にやってきた警察官は、「今日は無理、明日救出する」。

3月13日

- ・病院の看護助手夫妻が出動。療養病棟に残っている高齢患者のケアに当たる。
- ・午前と午後に、院長が町外れまで行き、出会った消防・警察に早期の救助を訴える。
- ・午後、双葉警察署長が来院。院長らが双葉病院に約130人、ドーヴィル双葉に約100人が残っており、早急な救出が必要と訴える。
- ・夕方、警察署長から「今日も無理」。
- ・警察署長から副所長らに交代(以降、15日まで行動を共にする)。

3月14日

- ・早朝に自衛隊の救出が来ると警察官から言われる。
- ・常勤医師1人が出勤し、救出に加わる。
- ・まずドーヴィル双葉の入所者全員をバスに乗せ、そのままバスは出発。9時頃にドーヴィル双葉(98人)は終了。
- ・次に双葉病院の東病棟1階の重症患者の救出を開始。院長ら職員4人は院内でトリアージと移動を警察官約10人と行う。
- ・病棟出口まで運ばれた患者は、自衛隊員によってバスに乗せられ、満員になると次々と出発。行き先も不明。
- ・医師が搬送に同行できず、カルテも残された。
- ・院長らが送り出した第二陣(34人)は北上し、南相馬市で保健所長によるスクリーニングを受け、4人が市内に入院。
- ・残りの患者は、福島、郡山を経由して、出発から10時間以上、230km先のいわき光洋高校の体育館に自衛隊による搬送された。
- ・体育館に医療施設は全くなく、灯油も不足で暖房も十分ではなかった。
- ・いわき開成病院に避難していた医師、看護師らが体育館への移動に加わった。
- ・いわき光洋高校には福島県から、おにぎり2000個が届けられていた。
- ・到着時、既にバス内で3人が死亡。翌日までに体育館で11人が死亡。
- ・翌日以降、多くが会津の病院や福島県立医大などに搬送された。

第二陣以降の経緯

3月14日

- ・第二陣の出発後、双葉病院に患者94人、自衛隊1人(隊長か?)、警察官、病院職員が残された。
- ・次の救出に備え、四つの病棟に残っている患者の人数、病状を自衛隊と警察官に伝える。
- ・11時1分、第一原発3号機爆発。
- ・残っていた自衛隊員は、「オフサイトセンターに行って指示を仰ぐ」と言って、ドーヴィル双葉の職員の自家用車を借

りて出かけたが、二度と戻ってこなかった。

・次の救出を待つため、職員は院内、警察官らは玄関前のワゴン車で待機。

3月14日から15日

・22時に突然警察官から避難指示される。院長らは警察のワゴン車で川内村の20km圏外の割山峠に避難し、警察官らと車中泊する。

・翌15日朝、郡山を出発した自衛隊と割山峠で合流することになったため、そのまま割山峠で待機。

・10時まで待っても、自衛隊が来ないため、近くの川内村役場に移動。

・午後になって自衛隊が別のルートで双葉病院に入って救出を開始したことを知らされる。

・この時点で再び20km圏内に戻ることは不可能と副署長に言われ、院長らは搬送に同行することを断念した。

・15日に2～3回に分けて救出された第三陣90人は、福島市や二本松市に搬送され、避難先で7人の死亡が確認された。

・院長ら職員は、川内村から第一陣が避難している、いわき開成病院に移動し、第一陣が残っている職員と合流した。



講演会には、弁護士の井上清成氏(右)やノンフィクションライターの森功氏(左)も参加。

↑ 前の記事

次の記事 ↓

東日本大震災(被災地の現場から)に関する記事(一覧)

「津波で全壊」、病院復興への軌跡を語る 2011/12/13

“双葉病院事件”の真相、当事者医師、語る 2011/11/1

「AllJapan」で実施、約10年のスパンで-東北大学医学部長・山本雅之氏に聞く◆Vol... 2011/10/10

現地レポート、震災から半年の石巻の今◆Vol.3 2011/9/29

救急受入と「入院制限」という矛盾に直面-南相馬市立総合病院院長・金澤幸夫氏に聞く◆Vol... 2011/9/27

「東北メディカル・メガバンク構想」とは-東北大学医学部長・山本雅之氏に聞く◆Vol.2 2011/9/22

被災3県、レセプト情報を薬歴把握や医療再建に活用 2011/9/20

心のケア重要、「問題あり」1割超、岩手・被災住民 2011/9/20

現地レポート、震災から半年の石巻の今◆Vol.2 2011/9/16

“有事対応”、医学部新設でなく定員増で-東北大学医学部長・山本雅之氏に聞く◆Vol.1 2011/9/15

「屋内退避指示」、入院患者全員を搬送-南相馬市立総合病院院長・金澤幸夫氏に聞く◆Vol.2 2011/9/14

現地レポート、震災から半年の石巻の今◆Vol.1 2011/9/12

災害対策のカギは人心の把握-双葉厚生病院院長・重富秀一氏に聞く◆Vol.5 2011/8/30

職員の4割は退職、全国各地に移動-双葉厚生病院院長・重富秀一氏に聞く◆Vol.4 2011/8/26

去るものは追わず、志ある人材を期待-福島医大長・菊地臣一氏に聞く◆Vol.4 2011/8/24

「死ぬ、この世の終わりだと思った」と職員-双葉厚生病院院長・重富秀一氏に聞く◆Vol.3 2011/8/19

福島医大復興ビジョン、「悲劇から奇跡へ」-福島医大長・菊地臣一氏に聞く◆Vol.3 2011/8/18

突然、病院に警察官、「逃げる」と指示-双葉厚生病院院長・重富秀一氏に聞く◆Vol.2 2011/8/16

“福島モデル”、県と医大の連携が奏功-福島医大長・菊地臣一氏に聞く◆Vol.2 2011/8/15

「病院丸ごと避難」、当初は全く考えず-双葉厚生病院院長・重富秀一氏に聞く◆Vol.1 2011/8/11

バックナンバー(一覧)

教えて！医療ニュース

未来の医師たちへー医師のリアルと2035年の医療

医師の働き方改革とキャリア

日本vs.米国、医師2732人を徹底調査！

医療維新10周年記念

一介の外科医、憧れの人に会いに行く：中山祐次郎・対談企画

セカンドオピニオン「医師×患者」調査

私の医歴書◆石飛幸三・芦花ホーム常勤医

離島医療39年◆瀬戸上健二郎・前手打診療所所長

m3.com意識調査

新卒医師・匿名座談会2017

総合診療専門医はなぜ必要か？2学会幹部スペシャル座談会

小説「朔風—バトラ—病院の午後—」

島根大“事故調”事件を検証

私の医歴書◆北村惣一郎・国立循環病研究センター名誉総長

熊本地震

臨床医学リスクマネジメント学会シンポ「大野病院事件を振り返る」

私の医歴書◆浅香正博・北海道大学名誉教授

m3.com × 『週刊ダイヤモンド』共同企画「医師&一般人緊急アンケート」

東日本大震災から5年

[新着](#) | [レポート](#) | [インタビュー](#) | [オピニオン](#) | [地域情報\(県別\)](#) | [スペシャル企画](#) | [医師調査](#) | [臨床賛否両論](#) |